

症候病態 TBL(Ⅱ)

(Team-Based Learning for Symptoms and Pathophysiology)

【責任者/担当者】

〔医学教育センター〕蓮池 由起子 医学教育センター長、庄司 拓仁 講師

〔医学教育学〕柏 薫里 講師

【担当者】

〔医学教育センター〕今西 宏安 准教授、他各教員

〔リソースパーソン〕臨床系各講座教員

【目的】

チーム基盤型学修(TBL:team-based learning)の手法を用いて、症候より病態・鑑別診断を考えるトレーニングを行う。疾患別の系統講義を縦の糸とすれば、症候・病態から考える本科目はいわば横の糸であり、これをもって臨床科目の理解が完成することになる。テーマによってはまだ系統講義が途中までであったり、始まっていなかったりする場合もあるが、各ユニット開始前に予習資料を配布するので、不明な点は自分で調べておくこと。さらには本科目で CBT や臨床実習、医師国家試験に向けて知識の整理をすることを期待する。

【科目キーワード】

「チーム基盤型学修(Team-based learning)」 「能動的学修(Active learning)」 「症候学(Symptomatology)」 「臨床推論(Clinical Reasoning)」

【到達目標(アウトカム)】

- ☐ 与えられた症候より各疾患の鑑別診断を列挙できる。
- ☐ なぜその症候がおこるのか、病態を説明できる。
- ☐ 検査計画をたてることができる。
- ☐ データを総合的に判断して最終診断に到達できる。
- ☐ 学生同士の適切なピア評価ができるようになる。

【ディプロマ・ポリシーと授業科目の関連】

- ・安心・安全な医療に強い使命感と自律性を有し、優れた協調精神を持ってチーム医療の一員として社会の福祉に奉仕できる良医となるべき素養を有している。
- ・医学・医療の進歩と改善に資するために研究を遂行する意欲と生涯にわたり自己研鑽を続ける態度を有し、同僚・後輩への教育に労を惜しまない。
- ・患者の持つ様々な問題点を科学的かつ統合的に捉え、的確に判断し解決できる応用力と問題解決能力を有している。

- ・基本的な診察法、医療技術、救命救急法を修得しており、全身を総合的に診療するための実践的能力、ならびに医療安全と危機管理の能力を有している。
- ・人体の構造、機能および異常や疾病とそれらの原因、病態、診断、治療に関する基本的な知識ならびに様々な疾病に対する適切な治療法を身につけている。

【概要ならびに履修方法】

臨床各科の協力のもとに行われ、約 1 週間で 1 ユニット、年間 4 ユニット予定している。1 学年を 5-6 名のグループに分割してチームとしてタブレットなどを使って課題を解決する。

1 つのユニットの構成は以下のとおりである。

STEP 1: (予習資料にもとづく自己学修) 前の週に資料を配布するので予習しておく。

STEP 2: RAT + feedback (+アピール) RAT は資料持込み不可。勉強してきた知識のみで考える。

RAT= Readiness Assurance Test

IRAT=個人テスト

TRAT=チームテスト

Feedback=問題の解説

アピール=誤答を挽回する機会

STEP3: 応用課題 Paper patient シナリオによる症例課題

資料持ち込み可。(ただしスマホ・電子機器による検索は禁止)

最後にユニット終了試験を行う。

【準備学修ならびにそれに要する時間】

予習資料を前もって配布するので、自己学修しておくことが必須である。ユニットにもよるが平均的には週末 3 時間以上勉強することを前提としている。

【成績の評価方法・基準】

RAT30 点、症例課題 30 点、ユニット終了試験 40 点であるが、総合的に評価し、すぐれた発表や、積極的な態度には加点し、遅刻や態度不良は減点する。ピア評価もグループワーク成績の重みづけとして用いる。

実習・実習と同じく全出席を義務付ける。事前に連絡のない欠席は論外で、当該ユニットの評価は受けられない(0 点)。10 分以上の遅刻は欠席とみなす。

前もって病欠の連絡があれば配慮はするが、当然点数的に不利になることは避けられない。筆記試験だけで評価するのではない科目の性質上、救済のための再試験は行わない。再履修者は夏休みに別シナリオを用意して、臨床推論のトレーニングをするので、必ず受講し合格する義務がある。

【学生への助言】

受講態度を重視するので、遅刻、態度不良は減点される。態度不良の例としてはグループワークに参加しない、別のことをやっている、スマホや音楽プレーヤーを出している、無断離席、授業中の飲食、RAT や終了試験のときの学生証忘れ、などである。

反面、積極的な態度やよい質問、アピールなどで得点を重ねるチャンスがあるので、成績に自信のない者は一生懸命やって得点をかせぐ努力をすること。

【フィードバック方針】

RAT、症例シナリオの検討、終了試験直後に毎回即時のフィードバックを行っている。

【オフィスアワー】

TBL の特性上、行わない。

【受講のルール、注意事項、その他】

実習と同じく全出席を義務付ける。事前に連絡のない欠席は論外で、当該ユニットの評価は受けられない(0 点)。10 分以上の遅刻は欠席とみなす。前もって病欠の連絡があれば配慮はするが、当然点数的に不利になることは避けられない。筆記試験だけで評価するのではない科目の性質上、救済のための再試験は行わない。

再履修者は夏休みに別シナリオを用意して、臨床推論のトレーニングをするので、必ず受講し合格する義務がある。

【教科書】

指定の教科書はないが、朝倉内科学、新臨床内科など一般的な教科書を用意する。

「TBL－医療人を育てるチーム基盤型学習」瀬尾宏美 監修

(バイオメディスインターナショナル)2009 年

【参考書】

特になし

【連絡先】

教育研究棟 3 階 医学教育センター